

趣味

写真に人物に始つて人物に終ると言われて居るが、これは写真とは人物の間に撮るものだからと言つて、味でなく、カメラを手にした時身近な家族の写真から始めて、次に風景やスナップ写真にうつり、それをマスターして再び人物撮影にかへると言ふことである。

カメラ放談

だが、流石に英首相ともなれば怒気満面の写真を時々提供する吉田さんとは大分趣が異なつて居る様である。上達すると海岸で写す人物に水を浴せ、雫のしたたりや光を顔のアクセサリとすることや子供は特に泣泣を等々、それく

死したと伝はれる米人で、世界の有名報道写真家ロバートキャバが英首相チャーチルを写しに行つたとき、カメラをかまいてから助手にチャーチルを突然ならせ、その怒った瞬間の表情をキャッチして大成功を収めたとかメラ雑誌に書いてあつた。



再會を約して 十年振りに疎開児童來町

「先生お久しぶりでございます。」「わあ!!先生だ。」明かい佐久間先生の声は、懐かしい眼ざしで黙礼する二人の大学生。十年前、再會を約束して別れた疎開の先生と二人の子供達(東京都深川区高橋小学校)を、白根の西永寺に訪れたのは、八月二十五日の夜でした。

「あの子供は元気でしょうか。」「就職して居るので、きたたくもお暇を取れない人が多いんです。僕達を駅までおくり、白根の方によくお出でなりました。」と二人の大学生は言葉少なに語る。

「曲屋さんで疎開当時使つた下駄棚があつたけど、とても懐しかった。」と佐久間先生は感無量の御様子。にこやかに耳を傾けられる、御住職の温顔。寮母さん達のいつくしみ深い眼ざし、奥様の心づくしの枝豆の山。こうした人の情のうるわしさを満喫しながら、あの頃若かりし師達は老い、幼なかりし子等は成長したといふ、十年昔にかへり、今昔の物語りに時を忘れる。



納涼句座

生野 十平 噴水の濡れた石の夜もひかる 霧でめて夜の汽船車の内燃ゆる ○ 鈴木 冬雷 一応は妻の鳴らせる蚊帳の縁もつ



室崎 十四春 待ちこがる夜暗れたり盆の唄 女性座にあり知性をおもはしむ 夏夜 砂山下る君が住居夾竹桃の花咲き

声



祭の山車と踊 年に一度の大祭の宮参りの節太鼓が聞えて来ると、そぞろに懐しくなる。惜しい事には燈籠と山車曳き廻しの順位が子供を喜ばせる理由から、まじくになって来た事は惜しい事である。

青年會

青年會と云うものは、田舎に行く程固くまとまっていけるのが行かぬ理由で脱退したりしているのだから、白根根性の最も悪い現われである。この儘では白根町青年會はおとろいて行くばかりではあるまいか。又連合青年會としても、大陸上競技大会の爲の御用青年會の様な現状は大に反省する必要がある。



さて白根町連合青年會をみると、各町内の単位青年會で、これに加盟しているのがわずかに半数。突つまらぬ理由で脱退したりしているのは、白根根性の最も悪い現われである。この儘では白根町青年會はおとろいて行くばかりではあるまいか。又連合青年會としても、大陸上競技大会の爲の御用青年會の様な現状は大に反省する必要がある。

スポーツ

神の微笑みを得たのだ、殊に女子選手は活潑な、消極的な白根女性の爲に大いに薬となつたと思ふ。近々又町民運動會もある。終戦後の馬鹿騒ぎから一時萎縮したこの行事も最近又復活の兆が見えるのも、町民融和の爲に欣快の至りである。末筆乍ら本年団体に於てレスリング優勝の小林君(高橋)も特筆に値する。

編集後記

初秋の燈下に館報第十六号をおく。いつも乍ら発行が後れて投稿された諸賢にも町民各位にも申わけない。猛暑に闘つた編集子の責任であり、おゆるしを願う。同人長井君先号の発行を最後に辞任を申出。足かけ五年有余、編集アイデアの確立を始め幾多の独創的企画と紙面スタイル、加ふるその名筆等々、まことに館報の貴重なポイントであり、再考を希んでいる。最近における世相は全く暗たんたるものがある。政界は私利に走り、道義は頓挫し、国民同志相いが分合。これでは國の再建は望まれな。だからといって私共はさしを投じてはならない。せめて私共のすむ地域社会を明るく楽しく持たせ、お互により高い教養と良識を持つた世の中をよくする近道である。(日生)